

【農林水産大臣賞】

受賞団体：めぐみの農業協同組合 ほらどキウイフルーツ生産部会（岐阜県関市）

～ 養蚕からキウイに転換し、クラウドファンディングで更なるむらづくり ～

1 むらづくりの動機、背景、経緯

岐阜県のほぼ中央に位置する関市洞戸地区は、地区の中央に2つの拠点集落があるほか、大小13の集落が散在している中山間地域で、近隣町村の農林水産物の一大集積地として栄えていたが、昭和25年をピークに人口減少が続いている。明治時代から養蚕が盛んに行われていたが、昭和40年代中頃から衰退を始め、桑畑の放置が課題となっていた。この養蚕にかわる産物としてキウイフルーツが注目され、地域のリーダーを中心としてキウイフルーツの栽培が始まり、昭和54年、9戸の農家により「洞戸キウイフルーツ生産組合」が設立された。その後、平成3年に農協へ移行、平成15年から組織名称を「JAめぐみのほらどキウイフルーツ生産部会」として活動している。

2 むらづくりの内容

(1) 持続可能な農業の実現に向けた取組

有機物等を有効活用した土づくりや環境への負荷の大きい化学肥料、化学合成農薬等の効率的な使用と節減を基本とし、生産性と調和できる幅広く実践可能な環境にやさしい「岐阜グリーン農業」に取り組んでいる。

生産部会は堆肥等の投入による土作り、有機質肥料の使用による化学肥料の削減及び予防防除の徹底と、機械除草による化学合成農薬の削減を実施している。

キウイフルーツは永年性作物であるため、持続的な農業を考えると、現在の生産者のみならず、将来の担い手にわたり必要不可欠な取り組みとなっている。



岐阜グリーン農業の表示板

(2) 産地後継者確保の取組

キウイフルーツの新規栽培を始めるには、園地の造成、栽培棚の設置に係る費用が必要であること、苗木の新植から数年間は未収穫（無収入）期間が生じてしまうことが課題となっており、その解消のため、平成15年に独自のシステムである営農継承システムを構築、売上の10%を地主に支払えば園地を借り受けできるという内容で、10人以上の部会員がリタイアした人の園地を借り受けている。

このシステムを活用することで、園地の荒廃を防止するとともに、12名の新たな産地後継者の確保も実現している。

(3) 体験学習、農福連携の取組

市内の小学生の校外学習として、春はキウイフルーツの受粉体験、秋は収穫体験と選果場見学など、地域農業を勉強する取組の支援を行い、将来の担い手育成やほらどキウイのファン育成に積極的に取り組んでいる。

また、令和元年度から市内の障がい者就労継続支援事業所にキウイフルーツの袋詰め作業の委託を始め、農福連携の優良事例として各地域から注目を集めている。



小学生のキウイ収穫体験

(4) PR活動と計画的な植樹推進の取組

令和3年度から「ほらどキウイを未来に繋ごうプロジェクト」（通称：ほらプロ）として、新規就農や規模拡大する際の100a分の棚の設置費用を支援するとともに、苗代500本分もクラウドファンディングで調達し、ほらどキウイのPRとともに、10年後の出荷量を20tに増加させる計画に取り組んでいる。

3 今後の展開方向

ほらどキウイフルーツ生産部会は、独自の経営継承システムや栽培研修会を継続し、部会員の営農を支えるとともに新たな就農者の確保を目指し、「ほらどキウイを未来に繋ごうプロジェクト」を地域一体で実施するなど、キウイフルーツを通じたむらづくりの取り組みを続けており、今後も取組の継続と発展が期待される。